特254
722

我國綿業の大勢

始

特254
722

阿部會長講演要領

（於第四師團將校團体會合席上）

我國綿業の大勢

（前　略）

さて、是より我綿業の大勢に就き、第一に我綿業が國内に於て何如なる地位を占めて居るか又世界の綿業界に於て如何なる地位を占めて居るかを、第二に我國の綿業が如何にして發達して來たものであるか、又日本の競爭相手である英國の綿業は如何なる興廢の經路を辿つて來たかを申上げ、第三に晩近の我國綿業貿易界の諸問題に就て其の狀況を概略御說明申上げ、最後に我綿業の前途は如何と云ふことに付て卑見を申述べて見たいと存じます。

○我國に於ける綿工業の地位

近年我國の產業は各方面に涉り長足の進步を遂げ特に重工業及化學工業方面の發展は實に目覺しいものがありますが。併し我が纖維工業就中綿工業の地位は依然として重要なることに於て變りはないのであります之を數字的に少しく申上げますと、商工省工場統計に於て、昭和八年度に於ける綿糸、綿織物、綿撚糸の產額は之を合計致しますと、十四億圓以上に上り、同年の製造工業生產總額推計約八十四億圓の十七%に當つて居ります。又投下資本に付て見ますと、綿糸紡績及綿織物に屬する資本金額は積立金を合しますと約六億五千萬圓に達し我國工業會社の資本金總額約六十億圓の一割餘に當るわけであります。更に關係人員に付て

見ますと、綿業關係工業從業員は約二十九萬人でありまして我國主要工業從業員總數約二百十萬人の十四%に當ります。此の外に運輸、倉庫、商業、金融等關係各方面の人員を考へに入れますと、我國綿業關係に依存する人々は想像以上に多數に上ることと存じます。

次に我國綿業の本邦輸出入貿易上に於ける地位は更に重要なるものでありまして、昨年即ち昭和十年に於ける本邦對外輸出貿易總額は約二十五億圓でありますが、其の內純綿製品たる綿糸、綿織物、メリヤス製品の總計のみにても五億八千萬圓餘に達し、總輸出額の二十三%に當ります。尙此の外に準綿製品關係のものを合計致しますと其の金額は數千萬圓に上り、嶄然第一位を占めて居るのであります。

次に輸入に付て見ますと、總額二十四億七千萬圓の內、棉花は七億一千萬圓餘でありまして、總額に對し約二十九%に當るのであります。即ち輸入に於ては棉花、輸出に於ては綿製品が第一位を占め、貿易總額の四分の一以上は直接綿業關係に依るものであります。爰に一寸申上げて置き度いと思ひます事柄は、貿易統計に現はれて居ります綿業關係の數字は一應昨年度に付て見ましても、一億三千萬圓餘の入超と云ふことになつて居りますが、仔細に研究して見ますと輸入棉花の金額は實際に海外に支拂はれるよりも約六%方多く算出されて居り、一方輸出の方に於きましては、雜貨其他綿織物以外の項目に含まれて居る綿糸、綿布の代金を集計致しますと、之が仲々大きな數字に上るのでありまして、是等を考へ合せますと、我國綿業の輸出入貿易は昭和四年以來多少受取超過の勘定になるのであります。即ち我國綿業は國內に於て消費せらるる莫

大なる綿製品の原料を其の勞力に依つてカバーして居ることになるのであります。言葉を換へて申上げますと我國には一俵の棉花も產しないにも拘らず、少しも原料代を海外に支拂はずして全日本人に常用衣類其他を供給して居る事になるのであります。以上で我が綿業が日本の貿易產業の上に如何なる地位を占めて居るかと云ふ事が略々御分りになつた事と存じます。

○世界の綿業界に於ける我綿業の地位

然らば此の日本の綿業は世界の綿業界に於て如何なる地位を占めて居るかと云ふ事を少しく述べて見たいと存じます。

綿業の大さを示す一つの見方であります紡績の錘數を取つて見ますと、千九百三十五年七月末に於ける世界主要綿業國の錘數は

英國	四二、六八八千錘	印度	九、六一三千錘
獨逸	一〇、一〇九	日本	九、九四四
佛蘭西	一〇、一五七	支那	四、八一〇
ロシア	九、八〇〇		
伊太利	五、四八一		
歐洲合計	九二、八六二千錘	**アジア**合計	二四、三六七千錘
米國	三〇、一一〇千錘	アメリカ合計	三四、八三六千錘
ブラジル	二、七〇九		

世界合計一五三、七七六千錘

即ち日本は當時に於ては英、米、佛、獨に次ぎ第五位でありますが、其後續々として擴張せられ、今日では既に一千萬錘を超えて居るのであります。更に支那に於ける邦人經營の錘數約二百萬錘を加へますと總計一千二百萬錘に達し英米に次ぎ世界第三位を占めて居ります。然も此一千二百萬錘の殆んど半以上のものは最新式の新鋭機でありまして、英米殊に英國の如きは殆んど二十年、三十年以前の舊式のものであるのに比べますと、其の質に於て雲泥の差があるのであります。

次に原料棉花の消費の方より見ますと、一千九百三十四年ー一千九百三十五年度に於ける主要綿業國の棉花消費量は大體、

米國	五、三二一千俵
日本	三、七三〇
印度	二、九三〇
英國	二、五〇七
支那	二、五〇〇
ロシア	一、九八六
獨逸	一、二〇〇
佛蘭西	九九六
總計	約二、五〇〇〇千俵

即ち棉花の消費に於ては斷然米國に次ぐ消費國でありまして、之に在支邦人紡績の消費量約百二十萬俵を加算致しますと、殆ど米國に比肩するものであります。

こゝで一寸世界の棉花生産の狀況に付て申上げますと一九三四ー一九三五年度に於て、

米國	一〇、六〇〇千俵
印度	四、八〇〇
支那	三、〇〇〇
ロシア	一、九〇〇
埃及	一、五〇〇
ブラジル	一、四〇〇

等が主なるものでありまして、其他**メキシコ**、**ベルギー**、**アルゼンチン**、**ペルシヤ**、東**アフリカ**、朝鮮、滿洲等各地に産しますが何れも二十萬俵見當若くはそれ以下のものでありまして、是等を總計致しますと、約二千五百萬俵位になるのであります、即ち米國最も多く約四割、次で印度の一割六分、支那の一割二分、**ロシア**の七分六厘、埃及の六分、**ブラジル**の五分五厘、といふ割合になつて居ります。此の内**ロシア**及支那は殆

んど自國内に於て消費してしまひますので世界棉花市場に於てはあまり問題にはなりませぬ。隨て世界の棉花市場の相場を左右するものは何と申しましても米國棉でありまして、印度棉、埃及棉之に次ぐと云ふ狀態であります。

品質の點より申しますと、埃及棉は最高級品でありまして六十番手以上の高級綿糸の生産に、米國棉は中級品で五十番手以下の各番手に、印度棉は概して下級品でありまして主として二十番手以下の綿糸紡出に使用されて居るのであります。

次に世界の主要棉花輸出國たる米國、印度及埃及の輸出量と、其の内我國への輸出量を一瞥致しますと、一九三四ー一九三五年度に於ては、

	總輸出高	内日本へ	日本への輸出割合
米棉	四、八〇〇千俵	一、五〇〇	三一%
印棉	三、四〇〇	二、〇〇〇	五九%
埃及棉	一、〇六〇	一〇六	一〇%

即ち米棉輸出の約三割、印棉輸出の約六割、埃及棉輸出の約一割を買取つて居る事になるのであります。

次に世界綿製品貿易關係に付て其の需給の狀態が如何になつて居るかを申述べたいと存じます。世界の綿布總消費高は凡そ四百億平方碼でありまして、其内一九三四年には約五十五億平方碼が貿易市場に現はれて居るのであります。之を主要輸出國別に見ますと、

日本	二、五七九百萬平方碼	約四六%
英國	一、九三五	三五
佛蘭西	三四六	六
伊太利	二二六	四
米國	二二六	四
和蘭	九〇	一、六
計	五、五五八百萬平方碼	一〇〇%

即ち日英兩國に依つて約八割を占めて居るのであります。而して日本の輸出は昨年に於ては更に躍進して二十七億平方碼を超え、英國を引離すこと實に七億平方碼に及んだのであります。昨年度世界の總輸出高を五十七億平方碼と推算致しますと、日本の輸出高は其の半數に達する有樣であります。今や世界綿製品輸出貿易に付ては全く日英兩國の角逐でありまして、茲に兩國の輸出の歴史を比較して見ますと一層明瞭となるのであります。即ち

	一九一三年	一九二〇年	一九三五年
英國	七、〇七五百萬平方碼	四、四三五百萬平方碼	一、九五〇百萬平方碼

然らば此の日英兩國は、世界の何れの地方に於て尤も激烈なる競爭をなしつゝあるかと申しますと、一九三四年に於ける日本品の輸出狀況は**アジア**洲最も多く約六十七%、次に**アフリカ**洲約二十%、南米五%等でありまして、之を更に國別に就て申上げますと、蘭領印度四億四千萬平方碼、英領印度四億一千萬平方碼、埃及二億二千三百萬平方碼、滿洲國一億七千萬平方碼、關東洲八千三百万平方碼、支那九千五百萬平方碼等が大きな市場であります。又英國の輸出に付て申上でますと**アジア**に三十六%、**アフリカ**に十六%歐洲に十六%、南米に十四%、大洋洲に九%等の割合になつて居ります。又之を國別に付て見ますと英領印度最も多く五億八千萬平方碼、南阿一億二千萬平方碼、濠洲一億四千萬平方碼等でありまして、曾て英國が覇を唱へた支那埃及は、前者は二千萬平方碼、後者は四千萬平方碼に減少して居るのであります、要之、綿布の輸出より見るとき、世界の重要市場は何と申しましても人口の多い印度、支那、南洋、埃及等でありまして、是等の國々に於て近時各種の通商障碍に關する問題が勃發して居りますが、何れも我綿業に至大の影響を齎して居ることは皆樣も御承知のことゝ存じます。此點に付ては後ほど項を更めてお話し申上げます。

○日英綿業の興廢

然らば此の綿業貿易市場に於ける日英兩雄の踏んで來ました經路、即ち如何にして兩國綿業が今日の狀勢に相成つたかに付き少しく御話申上げて見ませう。先づ世界綿業の元祖であり、歐洲大戰以前まで世界の綿布を一手に引受けて莫大なる富を集積し、英國世界制覇の爲めに重大なる役割を演じました**ランカシヤ**綿業に就て申上げます。

抑も、紡績及織布の起源は古く太古に溯るものでありますが、産業として殊に機械工業としての歴史は比較的新しく、十八世紀の後半彼の産業革命の時代に始めて英國に於て呱々の聲を上げたのであります。當時英國に於ては、國を擧げて潑溂たる新興の氣運漲り、産業界に於きましても幾多の天才を輩出し、早くも今日に於ける紡織機械と其の根本作用に於て殆んど大差なきものを發明致したのであります。既に御承知のことゝ存じますが、織布機械は「**ジョン、ケー**」の發明以來幾多の改良が加へられて、後千七百八十五年「**カートライト**」と云ふ僧侶に依つて今日の動力織機の完成を見たのであります。又紡績機械は「**ハーグリーブ**」の發明以來「**アークライト**」に至つて幾多の改良に成功し、今日の紡績工程と殆ど變らないものを完成したのであります。而も此の人に依つて、始めて水車を動力に利用して世界最初の紡績工場が建設されたのであります。更に今一つ忘れることの出來ない人は「**クロムプトン**」でありまして、此の人によつて有名な**ミユール**が發明され、此の**ミユール**に依つて、非常に精巧なる糸を紡ぐことに成功したのであります。

爾來百五十年間、**イギリス**綿業は世界に冠たる榮譽を擔ひ、殊に一八五〇年十九世紀の中葉より、交通機關の發達と、帝國主義の發展と相俟つて、世界到る處の市場が開拓せられましたので、綿布の需要も亦旺盛となり、此の供給を一手に引受けた**ランカシヤ**こそ、全く文字通りの黄金時代を現出したのであります。當

時英國の政治家は、**ランカシヤ**の意嚮を伺はずしては政治が執れなかつたと云ふ事であります。斯樣な狀態で順調裡に歐洲大戰を迎へたのであります。

飜て、今日隆々として世界に覇を唱へて居ります處の我が日本綿業の經路を申上げて見ませう。

我國に於て始めて紡績の機械が輸入されましたのは、慶應三年、今日より約七十年以前のことでありまして、島津齊彩公の創意に依り、始めて鹿兒島市外、磯の濱に洋式紡績工場が設立されたのであります。即ち英國に於て始めて紡績工場が出來てから約百年後のことであります。爾來政府が保護奬勵致しまして、其の發展に盡力されましたが、漸く明治十五年に至り東京、大阪の一流實業家の手に依りまして、始めて現代的大規模の紡績會社の設立を見たのであります。現在の東洋紡績會社の前身であります大阪紡績株式會社が是れで、現存の東洋紡績三軒家工場に其の跡を止めて居ります。設立當時の規模は、資本金二十五萬圓、**ミユール**一萬五百錘でありまして、顧みますと實に微々たるものでありますが、其の當時は仲々喧ましいものであつたのであります。又其の頃の思ひ出話には仲々面白いものがあります。據付技師として來朝して居りました「**ニールド**」と云ふ西洋人が、萬事指圖をしたのでありますが、「**ブラボー**」と「**ベラボー**」を取り違へて人足が立腹したなどの珍談があり、又「**スチームエンヂン**」の「**エキセントリツクシーブ**」の「**キーウエー**」が、どういふものか反對に取付けられる樣になつて居つた爲め、試運轉をやつて見ると、機械が皆反對に回轉して大騒ぎを演じたなどの笑ひ話もありました。又電燈を使用したのは、此の大阪紡績が先驅者でありましたが、當時非常に珍らしがられまして、大阪市内の各所から電燈の參觀申込が殺到するといふ有樣一々應接の煩に堪えないので、一ッそのこと一般に開放して縱覽させてはどうかといふことになり、三日間縱覽させましたところ僅か三日間に五萬人に上る見物人があつたと云ふ、今日から考へますと全く虛の樣な話であります。併し之が僅か今日より五十年餘り前の事でありますから驚くの外ありませぬ。

爾來我綿業は、國運の伸展と共に年々發達の一路を辿り、錘數の如きも殆ど十年倍加の勢を以て進んで來たのであります、殊に日清、日露、歐洲大戰の三大戰爭を劃期として飛躍的發展を遂げたことは、明かなる事實でありますが、其の發達の歷史を顧みますと、決して坦々たる一路を辿つて來たものではないのであります。明治二十三年には金融逼迫、爲替の暴騰及び囚作等に因る非常な恐慌に遭遇し、日清戰爭後明治三十年十一月金本位制が實施せられました爲め、爲替の急變により、漸く芽を出しかけた對支輸出に大打擊を蒙り、又三十三年の團匪事件には、我が綿糸の對支輸出は殆んど半減するといふ樣な苦みに會つたのであります。當時の紡績は殆ど皆んな貧乏でありまして、隨分借金に苦しんだものであります、唯今の樣に澤山の棉を買持するとか、銀行に多くの金を預金するとか云ふやうなことは、夢にも無かつた事でありまして、明日機械に打込む棉が無い爲めに、出來た糸を大急ぎで車に積んで行つて金にかへる爲めに奔走したとか、折角倉庫に棉が有つても其の鍵は銀行の手に握られて居つて、仲々出せなかつたとか、今日に於ては一場の笑ひ話として語られてゐる事柄ではありますが、當時に於ては經營者は何れも並々ならぬ苦心をしたものであ

ります。日露戰爭後は割合に順調たる發達を遂げて參りました。唯、明治四十年銀價の大暴落の爲め、我對支輸出が著しい打擊を受けましたが、之も漸次恢復致しまして、こゝに歐洲大戰を迎へたのであります。大戰爭中及戰後の好況後代に於て、我綿業今日の盛運の基礎を築き上げたのであります。殊に紡績業に於ては生產設備の上に於けるよりも、財政的方面に於て、確實なる基礎を作つたのであります。之は一つには此間に紡機の生產國である英國が、大戰の爲め極度にこの生產を制限して居りました爲めに、機械の購入が甚だ困難であつた事も、一面の理由ではありますが、先程も申上げました樣に、我國紡績業の經營者が過去に於て財政の基礎薄弱な爲めに、不況時に際し非常なる辛酸を嘗めたに省み、專ら會社の內容充實に努めました結果、財政狀態は全く一變して、戰後の反動的大恐慌の襲來にも克く耐へることが出來まして、今日の飛躍的發展を齎らしたのであります。

然るに、一方**ランカシヤ**に於きましては、大戰當時既に綿業確立の苦勞を嘗めた人々は世を去り、殆んど所謂第二世、第三世の苦勞知らずに好況裡に生長した人々の手によつて、綿業界は指導されて居りました爲め、何れも頗る驕慢になり、全く創造的經營心を缺き、凡ての改良進步を怠つて居りましたばかりでなく、戰後の**ブーム**時代に無謀の高率配當、增資、買收等の放慢なる經營が行はれました爲め、會社の基礎は極めて脆弱なものとなつて居りました所へ、其の虛に乘じて發達致しました勞働組合の强力なる壓力により、經營は思ふに任せず一時は職工の採罷は固より下級社員の任免に至るまで一々組合の幹部に計らなければ如何

とも出來なかつたといふ樣な狀態でありました。斯の如き狀態の下に日英兩國が戰後の綿業經濟戰に臨んだのでありますから、勝敗の數は戰はずして既に明かであります。其後に於ける日本綿業は、內に在つては大正九年の戰後の大反動的大恐慌により、糸價の大暴落、滯荷激增等殆んど生色なき有樣でありましたが、克く英斷的整理實行により其の難關を突破することを得ました。又昭和二年の金融恐慌等もよくその窮境を脫することりましたが、之とて一年餘にして恢復せられました。又大正十二年の關東大震災には大損害を被を得ましたことは、一つに當業者の一致協力に依り經營の合理化と業界の統制宜しきを得たる爲めであります。殊に紡績聯合會に於ては、强力なる**カルテル**により增錘と操業短縮とを以て、巧みに生產の調節を圖り業界發展に寄與した事は、皆樣も御承知の通りであります。尙又內地機械工業技術の進步に伴つて、國產紡織機の製造が非常に發達致しまして、今日では殆んど一品も輸入することなしに、完全に立派な紡績、織布工場を建設し得るのであります。寧ろ、今日の國產紡織機は、世界に其の比を見ない優秀なるものでありまして先年豐田自働織機の特許が高い値段を以て、綿工業の發祥地である**ランカシヤ**の、然も英國最大の紡機製造會社である**ブラット**社に賣られて行つた事は、當時非常な矢釜しい問題となりまして、皆樣も御存じのことゝ思ひます。殊に昭和五年濱口內閣に依る金解禁以來の世界不況に際しても、鋭意設備の改良と、經營の合理化が行はれました結果、昭和六年末金再禁止以後、爲替低落と云ふ輸出に有利な條件に惠まれ、此の良質廉價の日本綿製品は世界到る處の消費高の歡迎を受け、恰も堤を破つた洪水の如き勢を以て全世界の市

場に押し出したのであります。而して今日に於ては、世界六大陸何れの地に於ても日本綿製品を見ざるなしと云ふ樣な事になつたのでありまして、綿業の本山**ランカシヤ**に於て、失業救濟手當を受けて居る失業職工が澤山日本製の**シヤツ**を着て居つたと云ふので英國の議會で大問題になつたと云ふ話もあります。

事態斯の如くなりましては、先にも申上げました樣に、世界の各地に於て英國綿製品と正面衝突を起しまして、其の結果として現れましたのが日英、日印、日蘭、日埃等の會商であります。茲で一寸其後の**ランカシヤ**の狀況を申上げたいと存じます。歐洲大戰中英國は大戰參加の爲めに軍需品製造に追はれ平和産業である綿業を省る暇がなかつた間に、**ランカシヤ**最大の得意先であります**アジア**の市場では日本、支那、印度等が各々非常に自國産業の發展を來たしたばかりでなく、其他の市場へも進出して大に**ランカシヤ**の市場を荒し廻つたのであります。乍併**ランカシヤ**の綿業者達は大いに自國の綿業の優越性を過信致しまして、戰爭終了後自分達が出掛て行けば、市場の回復は易々たるものであると考へて居たのであります。而して戰後の**ブーム**時代にも事後に備へる事を圖らず、却て非常に放慢な經營に依つて、其の基礎を極めて脆弱なものにして居つたものですから、反動期の不況に遭遇しては到底亞細亞の市場を回復する所ではなく、却て優勢なる日本綿業の攻擊を受けて手も足も出なくなつたのであります。それでも始めの内は其の原因の奈邊に存するやを究めず、專ら日本の競爭を不正呼はりして居つたのでありますが、當時澎湃として起りました民旅自決運動の爲め、支那に於ては猛烈なる排英運動に惱され、印度に於ては**ガンヂー**一派の排英**スワラジスト**運動の攻擊に會ひ、**ランカシヤ**綿業は日一日と衰退するばかりであります。比の事は英國の綿布輸出數量の減退を一瞥すれば瞭然と看取されます。

英國綿布輸出高

一九一三年	七、〇七五百萬平方碼	一九三〇年	二、四〇六百萬平方碼
一九二〇	四、四三五	一九三一	一、七一六
		一九三二	二、一九七
一九二五	四、四三五	一九三五	一、九五〇

即ち、一九三一年には大戰前の四分の一以下に減少したのであります。之が英國産業大宗の綿業であり、英國輸出貿易の首位を占める産業に起つた事實でありますから、英國朝野を擧げての大問題となつたのも尤もな次第であります。其の結果として内に於ては一九二九年には、政府直屬の綿業調査會が設けられ、それには内相**クラインズ**氏、海相**アレキサンダー**氏を始めとして、英國朝野の錚々たる人々が顔を揃へたのであります、之に依つて綿業の根本的調査が行はれまして、大部の報告書が一九三〇年に發行されて居ります。其の結果と致しまして企業の合同、通商使節の海外派遣等が計畫され、東洋へも先年「**サーアーネスト、トムソン**」氏を首席とする使節が來朝されまして、色々東洋の事情を調査して歸られたのであります。又、外に對しては一九三一年世界金融の大本山たる面目を捨てゝ金本位制離脱を行ふやら、一九三二年には加奈陀に

於て、英帝國經濟會議を開催して、傳統の自由貿易政策を抛擲して、保護貿易政策への大轉向を行ひ、大英經濟ブロツクを形成して、頽勢の挽回を策したのであります。之が有名なるオツタワ會議であります。而して是等の政策の結果として現はれて參りましたのが日印會商、日英會商、日蘭會商、日埃會商等であります。以下是等の會商の經過に付少しく御話して見ませう。

○日印會商

一九三三年四月十一日印度政府は突然何等の豫告もなく、日印通商條約廢棄の聲明を行ひ、翌日には印度立法會議に於て、ダンピング防止法案を通過せしめ、之により六月七日イギリス品以外の綿布には、七割五分といふ殆んど禁止的高率關稅を課して、徹底的に日本品排擊の擧に出たのであります。是等は全く拔打的の事柄でありまして、多年の日印友好關係の情誼を無視した暴擧と申さなければなりませぬ。我日本は印度より毎年莫大なる棉花を輸入して居りまして、印度としては年々對日貿易に於ては受取超過になつて居つたのであります。然るに、僅か兩三年日本の品物が多く這入るやうになつたからと云つてかゝる暴擧に出るといふことは、常識上解し難い事であります。そこで吾々紡績業者は敢然として立上り、印度政府の反省を促す爲めに區々たる利害を超越し萬難を排して、六月十三日を以て印度棉花買入停止といふ未曾有の決議を行ひ、關係各團体の熱烈なる支援と同業者の一糸亂れざる結束の下に直ちに之が實行に移されまして、大いに印度朝野の心膽を寒からしめたのでありました。

日本政府と致しましても直ちに嚴重抗議致しますと共に、改めて通商會議を開催する事になり、政府側よりは澤田公使以下、我綿業關係よりは倉田、伊藤氏以下が渡印されまして、印度側代表の商務長官ボーア氏以下と折衝三ヶ月餘に及び、漸く現行の日本通商協定が出來上つたのであります。其の要點は、最惠國約款を認めること、關稅率を五割に引下げること、綿布の輸入を棉花の買入と關聯して棉花百五十萬俵に對して綿布輸入數量最高四億碼に制限せられたのであります。然も綿布の輸入に品種別の割當制限を受けたのでありまして、之は英國の競爭品となる樣なものの割當をなるべく少くしたもので、英國當業者の巧妙なる運動が功を奏したのであります。

棉花百五十萬俵と綿布四億碼を其の當時の値段で比較致しますと、一億八千萬圓と、六千八百萬圓と云ふ樣な極めて不利な數字になるのであります。大体以上の樣な取極めで、我綿業者に取りましては非常に不滿足な協安でありましたが、日印親善關係及國家の大局的見地より見て、忍ぶべからざるを忍んで此の協定に同意し、六月十三日以來の原棉買入停止の決議を昭和九年一月八日を以て撤回することに致したのであります。

此の日印會商は、日本綿業界に取りましては、最初の市場協定の對外交渉でありまして、今迄自由主義を以て進んで來た綿布の輸出に關し始めて統制主義を取ることになつたのであります。又、此の會商中最も困難なる印棉不買の決議が當業者の一致結束により完全に遂行せられたと云ふことは、如何に我綿業界が其の

非常時に際して結束一致に當るかと云ふことを、中外に示した事は、實に痛快事と云はなければなりませぬ

而して、此の會商の行はれた一九三三年即ち昭和八年に於て、始めて我國の綿布輸出高は英國の輸出高を凌駕して、英國が綿業創始以來未だ曾て何れの國にも讓らなかつた覇權を日本の手に收め得たと云ふことも奇しき因緣と申すべきであります。尙、此の協定の結果は、日本の對印輸出は四億碼に限定されましたが、當業者の熱心なる努力により未開の市場を開拓して益々進展を續けて居るのであります。英國の對印輸出は此の御蔭に依つて、晒加工の方面に於て幾分の回復を示して居りますが、大勢は結局、印度綿業の發達を刺激した結果となつて居る事は、印度紡績の錘數が急激なる膨張を來たして居ることに徵しても明かなことであります。

此の協定は、本年を以て終了することになつて居りますから、少くとも本年中頃には再び改訂の交渉が開始せらるゝ運びになると思ひますが、今度の改訂に於ては充分に不合理の點を是正し日印相互の繁榮の爲め適切なる協定の締結せらるることを希望する次第であります。

○日英會商

次に、今一つ近年に於ける綿業界の重要問題にして世界各方面の注意を喚起致しました日英會商に就て申上げます。

日英會商は、日印問題と前後して起つた問題でありまして、當時の英國商相**ランシマン**氏より、日英經濟關係全般に亘る問題を商議する爲め、日英民間代表を以て、日英經濟協議會を開催してはどうかと云ふ提議を受けたのであります。松平駐英大使及國際經濟會議に列席中の門野顧問等の熱心な斡旋もありましたので我方は協議の範圍を英國殖民地内の綿製品及人絹製品に限ることにして受諾したのであります。而して日本側代表は岡田氏以下紡績業者で、英國側代表は**マンチエスター**商議代表**バーロー**氏以下の綿業關係者でありました。

正式會議は、日印通商協定成立後、一九三四年二月より**ロンドン**に於て開催せられまして、約一ヶ月間六回の會商を重ね、色々協議を進めましたが、結局兩者の意見の一致を見るに至らず、遂に決裂の止むなきに至りました事は、甚だ遺憾なことであります。會議は何故に決裂したかと申しますと、英國代表は一九二九年世界の綿布輸出總額は約八十億碼、一九三三年にそれが五十億碼に減少して居る。然るに獨り日本の輸出のみが增加して居るのはけしからぬから、日本輸出を世界の水準まで減少して呉れ、つまり一九二九年を基準にして各大陸別に協定をしよう、若し此の提案に應じないならば、英國は各種の政治的手段を以て對抗するであらうし、又日本品の競爭に困つて居る各國の同業者も共同して日本品排斥の手段を取るであらうと云ふ樣な半威嚇的の言辭を弄して、吾に迫つて來たのであります。之に對し日本側は、我綿布の輸出增加は正當なる努力の結果に依るもので、何等批難さるべき理由はないと考へるが、貴方が競爭上御困りになると云ふならば、第三國市場及關稅自主權を有する自治領等は除外して、實際に於て協定が嚴格に實施出來る可能

性のある英國及各屬領地に付て協定に應じませうと云ふ、頗る協調的な態度に出たのでありますが英國側は頑強に自說を固持して讓らなかつたのであります。

一体英國の提案は、日本のみ販路を放棄して呉れ、そうすれば私の方でそれを頂戴するからと云ふ、極めて虫のよい言ひ分でありまして假りに英國の言分通りに致しましても、第三國及自治領の如き關稅自主權のある所は、第三者の競爭もありまして、日英のみの協定では何ともならないのであります。斯樣なわけで、滯英六ヶ月餘、終始協調的精神を以て交渉を續けて來ましたが、斯る理不盡な要求には到底應ずるわけには參りませんので、遂に會商不調のまゝ我代表は引擧げて來たのであります。

其の結果、英國は各殖民地に續々として割當制を實施し、露骨なる日本品排擊策を講じて來たのでありますが、之に依つて、日本の失ふ所は、約一億二千萬碼でありますが、併し世の中はよくしたものでありまして英國の各新聞が、日本品は廉價良質であるから到底**ランカシヤ**製品の敵でないと云ふことを、世界の隅々まで廣告して呉れた樣な結果になりまして、今迄あまり日本品の知られて居なかつた所まで、向ふの方から取引を求めて來られる樣な事になり、當業者の努力と相俟つて、中南米、北歐、**アフリカ**の西部に至るまで、日本品が行く樣になりましたことは、測らざる天惠とでも申すべきでありませう。

○日　埃　會　商

次に目下尙進行中の日埃會商に付て簡單に申述べますと、埃及政府は一九三五年七月突然日埃通商條約廢棄を通牒し、改めて新條約の締結を申入れて來たのであります。其の理由として居る所は、日本の圓價低落が埃及國內產業に打擊を與へて困るからといふのであります。併し埃及に於ける紡績業と申しましても、僅かに三工場あるのみで、國內需要の五分見當のものより製產して居らないのでありまして、之に過度の保護を與へることは、消費大衆に非常な迷惑を及ぼすものであると云ふので、埃及國內に於ても反對が多いのであります。埃及は歐洲大戰以前より**ランカシヤ**製品の重要市場の一つでありましたが、近年日本綿製品進出の爲めに壓倒せられて來たのであります。即ち、戰前**ランカシヤ**製品は埃及綿製品輸入の八割餘を占めて居りましたものが、一九三四年には二割三分に激減したのであります。之に反し日本品は戰前零でありましたものが一九三四年には六割弱に躍進し、驚くべき進出を示して來たのであります。之が爲めに英國は大いに焦慮し、一九三四年英埃通商關係の調整に乘り出した結果、埃及經濟使節の渡英となり、歸來幾何もなくして日埃通商條約の廢棄となつたものであります。即ち之とて英國の**ランカジヤ**綿業保護政策の一つの現れでありまして、英國外交政策の粘り强く而も一貫した方針の下に着々其の實績を擧げて行くことに對しては吾々は實に感嘆を禁じ得ざるものであります。之に對し、我政府は嚴重抗議を申込むと同時に、笠間**ポルトガル**公使を代表に任命し交渉に當ることになり、目下埃及**カイロ**に於て商議中であります。又綿業關係方面よりも夫々人を派して會商に協力して居る次第であります。

埃及政府は、皮肉にも我笠間代表の神戸出發の當日、四割の爲替補償稅の賦課公布實施をなすと共に、會

商に當つては、日本綿布の一定量輸入を許可し樣と云ふのでありまして、恰度日印會商の場合と同じ手段を以て同樣の結果を期待して居るのであります。之に對し我代表は極めて强硬なる態度を以て臨み、爲替補償稅の撤廢、最惠國約款の確保を根本方針とし、且つ其上に埃及國民の繁榮福祉の爲めには、良質廉價なる日本品の必要なる所以を認識せしめまして、合理的協定に到達する樣努力せられて居るのであります。速に會商の合理的解決を得まして、兩國共存共榮の爲めに通商關係の常態に復することを願つて居る次第であります。

○綿業の前途觀

今迄に申げました所に依りまして、世界の綿業界が今日どういふ狀態になるか、其の間にあつて我が綿業の輸出入狀態が如何なる地位に置かれて居るかといふことか略々御了解になつたことゝ存じます。

之を要するに、日本の綿業は今日迄旭日昇天の勢を以て進歩發展をして來たのでありますが、併し前途を眺めて見ますと、仲々多事多難を豫想されるのであります。即ち綿布の世界市場は益々狹隘になりつつある一方、英國は國を擧げてランカシヤ綿業回復策の强行を計りつつある現狀であります。然らば此の間に在つて、我日本綿業は將來如何なる方向に進まんとするものであるかといふことに付て、少しく考へて見たいと存じます。

其の前に一寸綿業が世界人類の衣類の材料は於て、占めて居る地位に付て、述べて見たいと存じます。

世界人類の生活、卸ち衣食住の內、衣に付て必要なる原料は殆んど纖維原料でありまして、此の所謂四大原料の生產高割合は國際聯盟統計年鑑によりますと、一九三三年に於ては、大体棉花七三●六%、羊毛二一●二%、生糸〇●七%、人絹四●五%となつて居ります。之を一九二八年に比較致しますと、棉花、羊毛、生糸が何れも多少の減少を示して居りますが、人絹は二●一%より二倍以上の增加を示して居ります。此の傾向は益々顯著となりまして、一九三三年の六億七千萬封度より、一躍昨年度は十億〇八千七百萬封度となり更に增加の傾向を示して居るものであります。卽ち人絹は將來人類の纖維工業原料として重要なる地位を占めるに相違ないのでありまして、此點に付ては輓近の化學の進歩より考へて最も注意すべき事柄であると思ひます。併し乍ら纖維原料の總數量より見て、又纖維の本質より考へて、棉花がこゝ五年や十年で現在の地位を動かされるものとも考へられないのであります。殊に人絹は其の原料を木材パルプに依る以上、數量の增加は必然的に原料木材の饑饉を招來し困難を感ずるものと考へます。目下人絹の材料として用ひられて居ります木材は、樹齡三十年見當のものでありますから、五年、十年で急に增產すると云ふわけには參りませんので、此の原料を他に求める爲めには各方面に於て鋭意研究中であります。我東洋紡績會社に於きましても此の點に留意し、色々研究を進めました結果、桑の木よりこの原料パルプを得ることに殆んど成功して居るのであります。何れに致してしも、結局は人絹は人類の纖維原料として重要なる役割を持つものと考へられます。將來は棉花、人絹、羊毛、各々其の特徵を發揮すると同時に、各種の交織物が益々盛んになること

ゝ存じます。我國の如く少しも棉花を產しない國に於ては、棉花の代用原料として充分研究する必要があるものと考へます。

昭和十年度に於ける日本人絹生產高は二億一千八百萬封度でありまして、世界總生產額の約二割に相當し第一位の**アメリカ**の生產高、二億五千四百萬封度に接近しつゝありまして、將に之を凌駕せんとする形勢であります。我國人絹業の將來こそ實に注目に價するものがあるのであります。

乍併、先程も申上げましたやうに、量的重要さに於てはまだまだ綿業の地位は、確固として動かないのであります。

近年各國の貿易政策は、極端なる保護主義をとり、殊に輸出入の均衡と云ふことが非常に喧しく云はれる樣になりました結果、關稅障壁を高めるとか、求償制度にするとか、割當制度を實施するとか致しまして、外國品の輸入に色々制限を加へる傾向が甚だしくなつて參りましたから、勢ひ我國の如く大いに外國から買ひ、大いに外國へ賣らんとする自由通商主義を建前とする國に於ても、自衞上已むを得ず、世界の實情に順應して、適切なる對抗手段を講じて行かなければならない樣な狀勢になつて居るのであります。如斯情勢に在るときは、或る國より多くの品物を買つて居るといふことは、其國に對する輸出を護る上に於て、最も有力なる武器となるのであります、即ち日印會商に於て、印棉不買の決行をなして印度側の反省を促したと云ふ事は先程申上げました通りであります。故に日本が現在多額の棉花、羊毛等の原料品を買つて居るのでありますから、此の事實を利用して差引入超となつて居る國々に對しては、積極的に商議を開始して市場の獲得に努力する必要があると考へます。在來の會商は何れも先方より仕掛けられて始めて立上つたものが多く隨て何れもあまり滿足すべき結果を得て居らない樣に思ふのであります。依て今後は官民一致して積極的經濟外交を進める必要があると信ずるものであります。

さて、我國が多量の棉花を買つて居ることは、其の相手國に對して貿易上、有力なる武器には相違ないのでありますが、まさかの場合には、其の國から買はなくても困らない、他に幾らでも代用品を求め得るのでなければ、折角の武器も、其の威力を著しく減殺されることは申す迄もありませぬ。

此の意味に於きましても、米國棉、印度棉、埃及棉に對し品質數量共に代用すべき棉花の供給地を持つ樣準備して置くことが必要となるのであります。世界不況以來、米國が棉花の生產統制を計り、數量の減少、價格の昂騰を策しました結果、世界各國に於て棉花の增產を奬勵した結果となり、南米特に**ブラジル**及支那等に於ける增產は、顯著なる發展を示して居るのであります。殊に**ブラジル**に於ける棉作は數年以前四、五十萬俵を超えず、其の大部分を自國の消費に充てゝ居つた程度でありましたが昨年度には百五十萬俵、本年度に於ては二百萬俵に上ると云ふ豫想であります。而も其の品質は埃及棉代用の長毛筋ものから米棉下級品に至るまで、夫々相當量を產出するに至りました事は、我綿業にとり誠に結構なことであります。而して**ブラジル**棉花產額の二割餘は我が移民の手に依つて耕作されて居ることを聞きまして益々親しみを感ずるもの

であります。

先日當地に於きまして、日伯棉花株式會社の創立を見ましたことは斯樣な意味に於きまして誠に喜ばしきことでありまして、將來**ブラジル**棉花の輸入に便利となり、急速に增加するものと期待して居る次第であります。

又我國に於きましても、朝鮮及滿洲に夫々增產計畫が進められて居りまして、着々其の實績を擧げて居るのでありますが、總數二十萬俵見當でありまして、數量的には未だ滿足すべき狀態にはなつて居ないのであります。尙最も有望なものは支那特に北支に於ける棉花栽培でありまして、支那在來種のものは粗剛で多く蒲團棉の原料に使用されて居つたのでありますが、近年國民政府も自國產棉花に非常な力を入れ改良奬勵に努めて居ります結果、南支及北支に、米棉に代用し得るものが著しく增加して來たのであります。斯樣に今迄棉花の生產は殆んど英米兩國の勢力範圍內に握られて居つたのでありますが、近年は朝鮮に滿洲に、北支に、**ブラジル**に日本人の勢力の及ぶ所に於て、日本人の研究指導の下に、棉花の改良栽培が進められる樣になりましたことは、國策上の見地より申しましても誠に慶賀すべきことと存じます。勿論かゝる農作物の事でありますから、氣候、風土等の關係もありますので、急速の進展は難かしいかも知れませぬが、日本人獨特の優れた才能は、品種の改良に、收穫量の增加に驚くべき改良進步が行はれるであらうことは、他の種々なる事例に鑑み想像に難くないのであります。斯の如くにして紡績原料の供給が、英米人の勢力圈內より

我が日本人の手に移るならば、棉花は今日よりも驚くべき安い値段で供給される樣になり延ては綿製品の價格に付、今日より更に安價に供給し得るものと信ずるのであります、こゝに始めて日本綿業が原料、製品、設備を通じて完全に世界に覇を唱へ得るのであります。

次に、我綿業內部の問題に就て考へて見ますと、綿糸、綿布の增產は、市場の擴大、より以上に上り、爲めに供給過多の惱みあるに拘らず、尙續々として新錘の增設を見んとして居ります。即ち現在旣に一千萬錘の紡錘が二割六分餘の操短を行つて居るに拘らず、尙百萬錘餘の增設計畫が樹てられて居るのであります。又一方綿業關係內部に於きましても、紡績聯合會、綿織物工業組合聯合會、輸出組合等の間に於て、仲々面倒な問題が起りつゝあるのでありますが、併し乍ら、是等の點に關しては、日本綿業對策協議會が組織せられまして、互に協調して斯界發展の爲めに折角盡力されて居るのであります、特に新錘の如き問題は、一面に於て年々歲々新式優秀なる機械が製產されつつある證據であり、我綿業界の日進月步の狀態を如實に示して居るのでありますから、少しも悲觀するに當らないのであります。此の機械の進步ありてこそ始めて我綿業界が健全なる發展をなし、後進國の追隨を許さざることになるのであります。機械の製造權が**ランカシヤ**に握られて居つた約三十年間、殆んど進步を見なかつた紡績機械は、後進日本をして追跡を容易ならしめ、更に其の覇權を奪るの已むなきに至つたのであります。如斯は、退嬰萎靡、彈力性なき業界に於て、求めて容易に得られない現象でありますが、只あまりに度を過さざるやう戒心する必要があります。

今世界人口と、紡績錘數及棉花消費量を、大陸別に比較して見ますと

	人口	人口百萬人當据付錘數	人口百萬人當棉花消費量
ヨーロッパ洲	四八四百萬人	二〇四千錘	一八、〇千俵
アメリカ洲	二四八	一四五	二七、八
アジア洲	一、一二四	一九	六、六
アフリカ洲及大洋洲	一五六	一一	二、五
總計	二、〇〇九	七九	一一、七

即ち此の不自然なる分布は**アジア**の文化の進展と共に漸次訂正されつつあるのであります。

更に**アジア**の紡績國である日本、印度、支那に付て其の紡績据付錘數及棉花消費の狀況を示して見ますと一九一二年を一〇〇として、

	日本 据付錘數	日本 棉花消費	印度 据付錘	印度 棉花消費	支那 据付錘	支那 棉花消費	**アジア** 据付錘	**アジア** 棉花消費
一九一二年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一九二〇	一五六	一二九	一〇八	一一四	一九二	一三三	一二七	一四四
一九二九	二九六	一九一	一四〇	一二四	四二三	三七二	二〇三	二二〇
一九三三	三六七	二〇〇	一五三	一六四	五三九	四九二	二三九	二六六
一九三五	四五八	二五八	一五五	一八三	五七五	四七〇	二六四	三〇〇

即ち三國共に年々驚異的發達を遂げつつあることが明瞭であります。之に反し、歐洲に於ては英國の稠落最も甚だしく、**アメリカ**合衆國は殆んど變化がないのであります。

斯樣な狀態でありますから、例へば支那に棉花の栽培を奬勵することより購買力の增加を計るならば、綿布の需要の增加すことは明瞭であります。支那の綿業が發達した、印度の綿業が盛んにたつたと申しましても、人口一萬人當りの綿花消費高を見ますと、支那に於ては平均五十四俵、印度に於ては六十二俵と云ふ數でありまして、歐洲平均百八十一俵、**アメリカ**洲平均二百七十八俵には遠く及ばないのであります。此點より考へましても、**アジア**、**アフリカ**、南米等には、綿業發展の餘地が充分殘されて居りまして、將來我綿業進出の天地であると考へて差支ないのであります。

何れの時、何れの世界、何れの仕事に於ても、其の進歩發展の途上に於ては必ず障害困難の伴ふものでありまして困苦を伴はない繁榮は寧ろ却て危險を含むものであります。我綿業界の前途には幾多の障害を豫想せられるのでありますが、併し此の卓越せる組織、勤勉なる勞働力、進歩せる機械設備、加ふるに百戰錬磨凡ゆる苦難と闘つて來ました指導者を以て築き上げられた、鞏固なる基礎の上に立ちたる我綿業は如何なる難局に遭遇するも、一致協力よく之を克服して益々進展することを疑はないものであります。英國政府の日

本品排撃、印度、埃及政府の不當なる關税引上等も、斯る不自然なることは到底永く續くものとは考へられません。良質にして廉價なる我が綿製品は世界人類の爲めに其の生活内容向上に寄與する天の使命を受けて居るものであります。現に蘭印に於きましても、**アフリカ**に於きましても、今迄半裸体若くは裸体に近い風をして居りました土人が、今迄と全く同じ購買力を以て上衣を着け、帽子を被り、靴を履く樣になつたのであります。是れ皆日本品の進出の結果であることは既に御存知のことと存じます。即ち吾々は天下無寒人の理想に向つて努力して居るものであります

乍併、此に吾々が最も戒心を要することは、我綿業が既に世界に覇を唱へ天下無敵であると云つて得意になることであります。敗事多因得意時と云ふ言葉がありますが最も恐るべき敵は、外に在るのでなく内に在るのであります。英國綿業の歴史こそは雄辯に此の事實を敎へて呉れて居るのであります。此際各方明に起る障碍こそは天が我綿業に與へたる試金石でありまして、此の試練に耐へてこそ將來一段の飛躍發展を期待し得るのであります。

是を以て私の講演を了ります、御清聽を感謝致します。

（非賣品）

昭和十一年五月二十九日　印刷納本
昭和十一年六月一日　發行

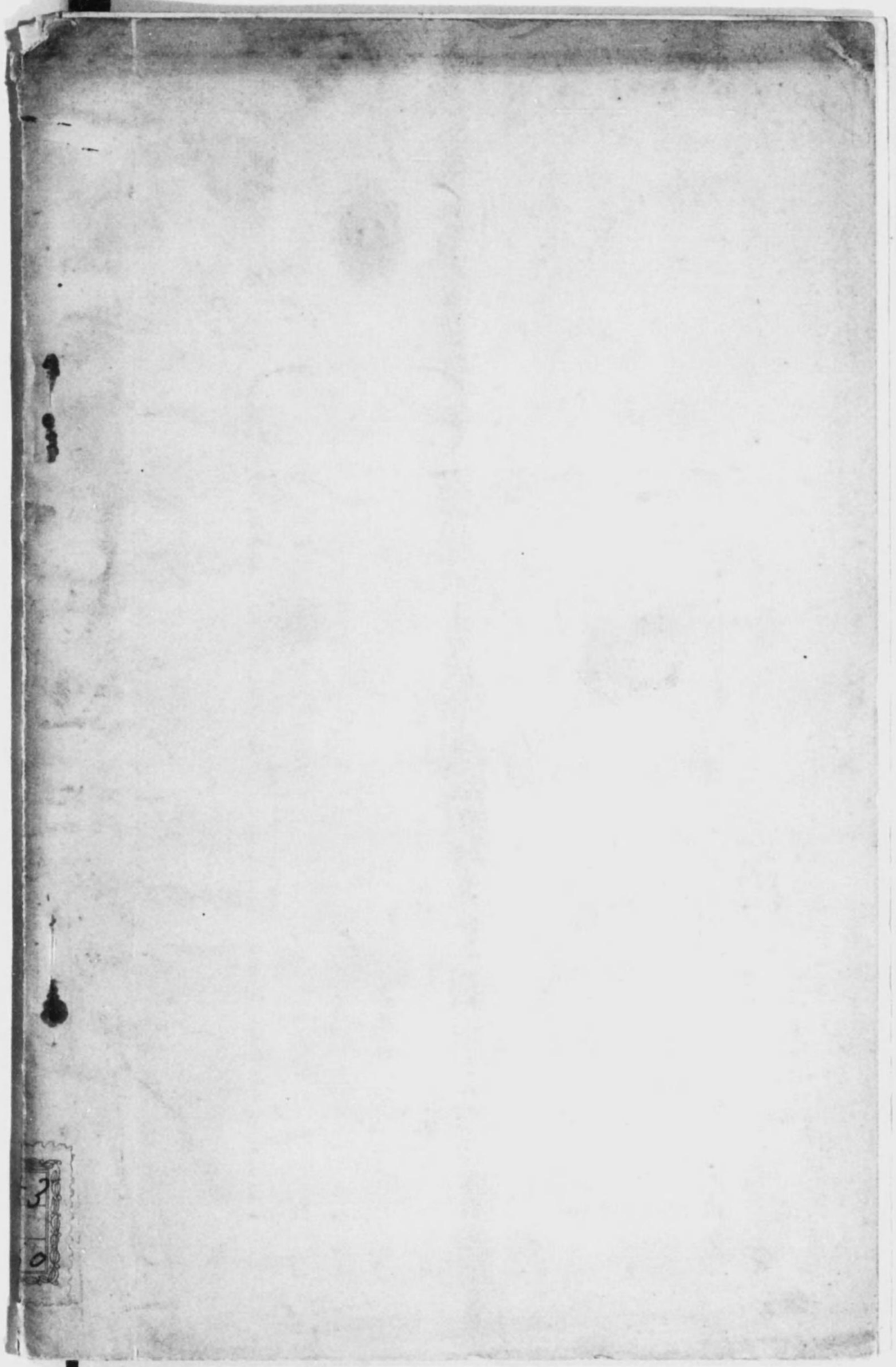
愛知縣知多郡半田町

發行人　佐藤忠

名古屋市東区宮町三丁目

編輯兼印刷人　伊勢清

愛知縣知多郡半田町

發行所　東洋紡績株式會社
知多工場

終